

落花吟三十首 次韻龍護叔 錄六

落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六つを録

す

其の四

【原文・書き下し文】

1 細雨連朝滴 _二 小園 _一	さいうれんちょう しょうえん したた
2 吟詩誰復叩 _二 柴門 _一	し ぎん たれ ま さいもん たた
3 人迷芳草烟中路	ひと まよ ほうそうえんちゆう みち
4 鳥恨落花風外村	とり うら らつかふうがい むら
5 王母桃殘應結 _レ 子 _レ	おうぼ もも のこ まさ み むす
6 孟宗竹老已添 _レ 孫	もうそう たけ おお すで まこ そ
7 不知春色何處去	し 知らず 春色何れの処にか去る
8 數點唯餘綠蘚痕	すうてん た あま りよくせん あと

【平仄・詩型・押韻】 ○平声 ●声 ◎平声の押韻

1 ● ○ ○ ● ● ◎
2 ○ ○ ○ ● ○ ◎
3 ○ ○ ○ ○ ○ ●
4 ● ● ● ○ ○ ◎
5 ○ ○ ○ ○ ○ ●
6 ● ○ ○ ● ○ ◎
7 ● ○ ○ ○ ○ ●
8 ● ○ ○ ○ ○ ◎

七言律詩

『広韻』上平二十二元(園)二十三魂門・村・孫)二十四痕(痕)同用。『平水韻』上平十三元。

【校勘】

『清狂遺稿』以外に参照すべきもの無し。

【現代語訳】

其の四

こぬか雨がしとしとわずかばかりの庭に幾日も降り続き、詩を吟じてばかりでこの柴の戸を叩

く人などいない。

草かおり霏^{もや}がかかる道に人は迷い、風に吹かれ散つてしまふ村里の花に鳥は恨みがましく鳴いている。

西王母の桃の木は残つてきつと実をむすぶであろう、孟宗の竹は年を経て孫のような竹がもうたくさん増えている。

春の風情はどこに行つてしまったのか、緑の苔がいくつか残っているだけで。

【語釈】

1 細雨 小雨。寂しく心もとない情感を表す詩語。唐、杜甫「風雨に舟前の落花を看て戯れに新句を為る^{つく}（風雨看舟前落花、戯爲新句）」詩に「江上の人家 桃李の枝、春寒細雨 疎籬^{そり}（粗く作られた垣根）より出ず^い（江上人家桃李枝、春寒細雨、出疏籬）」。月性の詩には秋の光景を詠む詩にも「細雨」は用いられるが、春の光景を詠む詩には「春詞十首」其二（『清狂遺稿』上 二四歳に「細雨空濛^{もよう}として「朦朧^{もうろう}としたさま」山も亦た眠り、小窓 吟倦^{ぎんう}みて日は年の如し（細雨空濛山亦眠、小窓吟倦日如年）、「廣島」詩（『清狂遺稿』上 二五歳に「細雨頻りに来たる三月の暮、飛花又た老いたり一年の春（細雨頻来三月暮、飛花又老一年春）」がある。連朝 〈連日〉と同じ意味だが、この句の四字目が平声「○」に属する〈朝〉の字を用いなければならず、仄声「●」に属する〈日〉の字は使えない。「鼓嶽西兄^{こかくさいけい}（西贊1803-1851、字は叔襄^{しゆくじやう}、号は鼓岳^{こかく}）予を誘いて丹邱^{たんきゆう}（佐賀の多久^{たぐ}）に赴く途中の作（鼓嶽西兄誘予赴丹邱途中作）」詩（『清狂遺稿』上 二三歳頃に「連朝の積雨溪声怒^{けいせいいか}、此の日新たに晴れて山色妍^{けん}たり（美しい）（連朝、積雨溪聲怒、此日新晴山色妍）」。小園 小さな庭。自分の家の庭を控えめにいう。2 吟詩 雨で外に出掛けることもかなわず、詩を吟じるばかりであるということ。誰復 いったい誰が……というのか。反語のことば。劉宋、鮑照^{ほうしょう}「樂府詩八首・東武吟」に「時事（時勢） 一朝に異なり、孤績^{こせき}（自分の功績） 誰か復た論ぜん（時事一朝異、孤績誰復論）」。柴門 雑木で作つたような粗末な門。「梅雨」詩（『清狂遺稿』上 二〇歳に「久しく柴門迎送の勞絶え（長雨で来客の送り迎えをすることがなくなった）、庭階 遮莫^{ていかい}（なんとでもなつてしまえばよい） 蓬蒿^{ほうこう}（よもぎ草）に没するを（久絶柴門迎送勞、庭階遮莫蓬蒿）」。3・4 戸外に目を遠く放つて晩春の景色を詠む。3 芳草 かぐわしい草。春に使われることの多い詩語。劉宋、謝靈運^{しゃれいゆん}「赤石（地名）に遊び、進みて海に帆^{はん}す（海に舟を浮かべる）（遊赤石進帆海）」に「首夏^{しゅか}（夏の初め）猶^なお清和にして「さわやかで」、芳草も亦た未だ歇^{まつ}きず（首夏猶清和、芳草亦未歇）」。烟 〈煙〉と同じで、霏^{もや}や霞^{かすみ}。4 鳥恨 花びらが風に吹かれて散り落ち、それを鳥が恨みがましく鳴いていると見立てる。唐、張祜^{ちやうこ}「馬嵬^{ばかい}（唐の楊貴妃が死んだといわれる所）より帰る（馬嵬歸）」詩に「雲は愁^{うれ}え鳥は恨む 駅坡^{えきは}（馬嵬坡という宿場）の前、子子たる龍旗^{りゅうき}（突

出した天子の御旗」 賢を指望す〔賢者の出現に期待を掛ける〕（雲愁鳥恨、驛坡前、子子龍旗指望賢）。落
 花 春も終わりになって散り落ちる花。 風外 風が吹くその向こうの方。上句の〈中〉が、
 道に生える芳しい草が靄の中にあるのに対して、この〈外〉は、村里に咲く花が風が吹くその
 遠く向こうまで散り飛ばされることをいう。北宋、歐陽脩〔謝学士〔詔勅などを起草する官〕の闕
 〔朝廷のある都〕に帰るを送る（送謝學士歸闕）詩に（人は醒む 風外の酒、馬は度る 雪中の関
 （人醒風外酒、馬度雪中關）。 5・6 視点を遠景から中国の故事を用いながら〈桃〉や〈竹〉の
 近景に転じる。 5 王母桃 仙女の西王母の所有する果樹園で三千年、或いは九千年に一度実
 る不老長寿の桃で、蟠桃ともいう。小説『西遊記』で、孫悟空が西王母の桃を盗み食べた話は
 有名。老人の誕生日などで中華料理のデザートとして出される饅頭も桃の形をして寿桃〔中
 国語シヨオタオ〕と言われる。 應 きつと……するはず。 子 実。 6 孟宗竹 二十四孝の
 ひとりに数えられる三国時代の呉の孟宗は、病に臥した母親が冬に筍を食べたいというので、
 竹林に探しに行ったが季節柄見つかるはずもなく、歎き哀しんでいたところ、急に筍が生えて
 きたという。 老 年月を経て古くなる。上句の〈残〉の字と対を成して、晩春の名残を表す
 にふさわしい。 已 すでに。上句の〈應〉が将来のことをいう助字〔名詞・動詞・形容詞など実
 質的な意味内容のある語を表す語というのに対し、主として前置詞・副詞・接続詞・句末詞・否定詞・疑問詞な
 ど実字を助けて文章の意味の関係を表す語で虚字ともいう〕に対して、これは既成の事実という助字を
 用いるという工夫がある。 添孫 孫世代の筍が生える。〈添〉は生まれる。〈孫〉はこの句の
 「老」にも対応し、また上句の〈子（意味は実だが、字面は子ども）〉にも懸けた遊び心がある。 7・
 8 愛（め）でるべき春の喪失感をもって詩を結ぶ。 7 不知 ……というのがわからない。この句
 を（春色（しきしよ）の）何れの処（ところ）にか去るを知らず）と訓むことも可能。 何處去 どこに去って行く
 のだろうか。唐、王維〔李員外〔官名〕の賢郎〔御子息〕を送る（送李員外賢郎）詩に（少年 何れ
 の処にか去る、米を負いて〔母親に孝行するために米などの食べ物を背負っていく〕銅梁〔母親の居る
 地名〕に上る（少年何處去、負米上銅梁）。 8 綠蘚痕 緑のコケ。〈痕〉はここではコケそのもの
 をいい、いわゆる痕跡ではない。明、龔詡〔閒居四景（閒居四景）詩の其一に（地僻〔ちへき〕にして〔佳
 まいが辺鄙なところにある〕車馬の過ること無きを喜び、春風 正に満つ緑苔の痕（地僻喜無車馬過、
 春風正滿緑苔痕）。また〈蘚〉は〈苔〉と同じ意味だが、この句の六字目が仄声〔●〕に属する
 〈蘚〉の字を用いなければならず、平声〔○〕に属する〈苔〉は使えない。